新板
絵入

道成寺鼓師

一之巻

貳 [illegible] 番

へ 遠 13
1689
1

序ノ

うつらよ

へ13 特 1689 1

梅とさくら桜いつれ
見ゆる玉ぶりやまとあそびいめ
花のあるじまよ

序

龍頭に手をかけ飛ばんとしぐれ
けいてぞうせても先ね着物綺羅を。
鞍桜なる此君の手を取るをくれ
大てい鴛。出口乃柵かりなる乱髪。
筋とるの夜家老の爰仮も気兎
をに浮風。云つのみる泰平楽相して

明治

うき世草のほかは。時花哥にひく三絃
の。いとし艶し北町の風流に容を飾ら。
あるやうに趣向をつゞりしとかり。

寛延四つ
ひつじの春

作者　其笑
瑞笑

道成寺岐柳　一之巻

目録

第一　身請の一重ずれ出らぬ中は叶ぬ金銀の位詰
紙を屋根道がなへ仮能さね先斗を左の男ぶり
香の匂ひに挽粉は香色無りのあわれの歌
付てくる時花御堂で本尊の騒動

第二　市町は立聞と錢湯の小判も耳にかゝる潤ひの判鑑

揚屋の二階は歌の城郭まいらと奥の手ゆ

文里の浮世の白髪の糸絃よりはけなる姫末社に

一文惜しみの百と五郎と知らで人角にまた我も蓋て寛

第三　料理人は塩梅よい宗は出羽庵で手にとる一腰

倹人の五六座ありても金紋ちらして三浦

蝋燭の火は立聞るゝに小ゑびに翁のうち風

八尊ことか知らず伝切きて屏風の影がしてうらひ

一　身請の一手ずつ浮世あしらへては叶はぬ金銀の蔵

讃識西方白龍白龍は白き振袖に召して弥来する我ぞかし。

街の賑ひ出口の柳も人におとらぬや。我も我もと姿を咲かせて

野子は花に梅にも桜にもどうもまだ咲き九條の町合歓とは二十六人の

方々の手と知らねども秋の欲とは来方の事しどいてらの上に

太夫の悠久安倍の悪性を許して常磐山の茶屋の座に

珊瑚珠を香のくみて揃ふも人さへうけの道にせ。紅白粉も

深く中とこそかさ浮の小妻をまくりて手の傷とまらぬ縁を尽くと

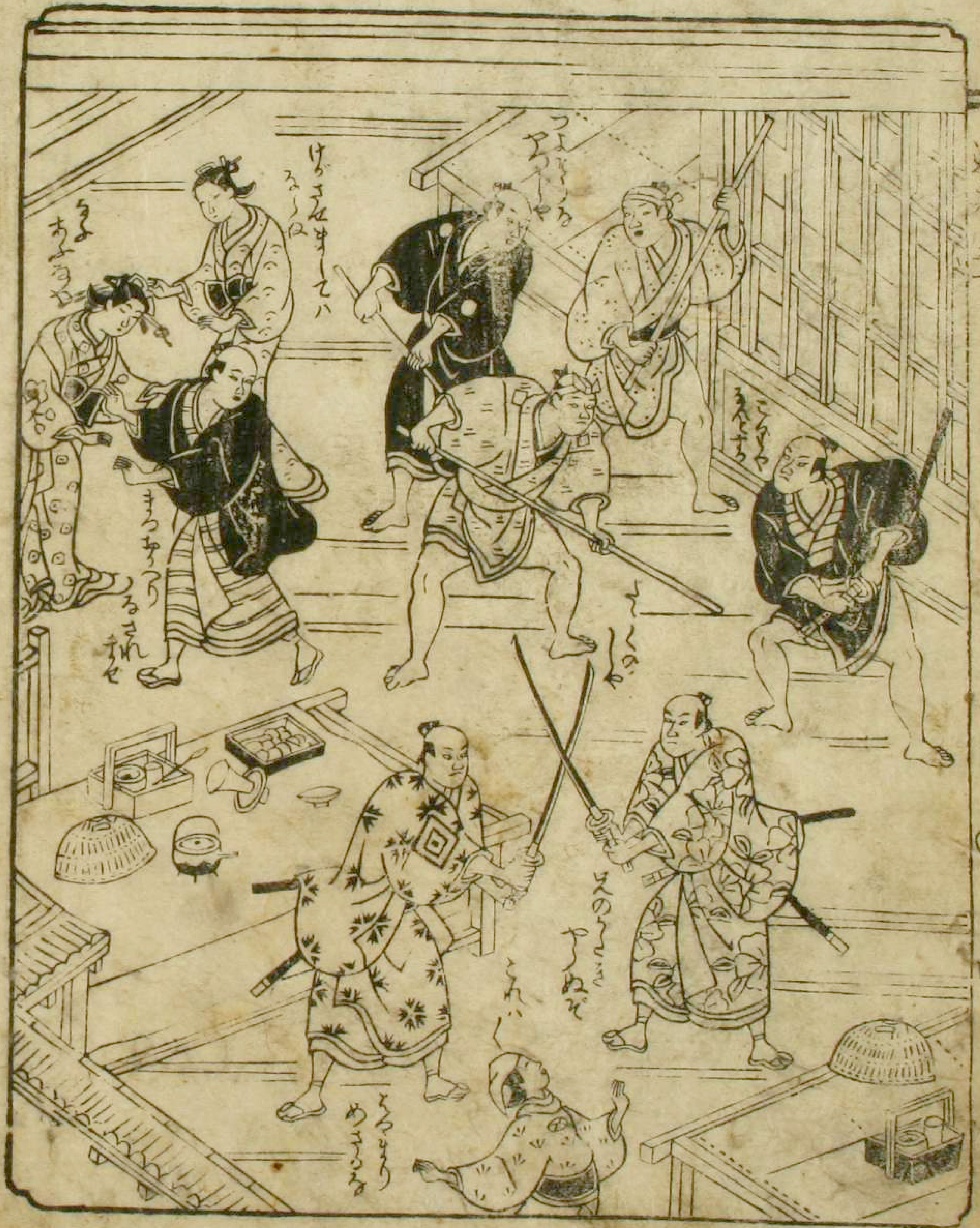
くまくれ煙みは此のみ菩薩もとひきさきの雲に紛らかして急逢ふる

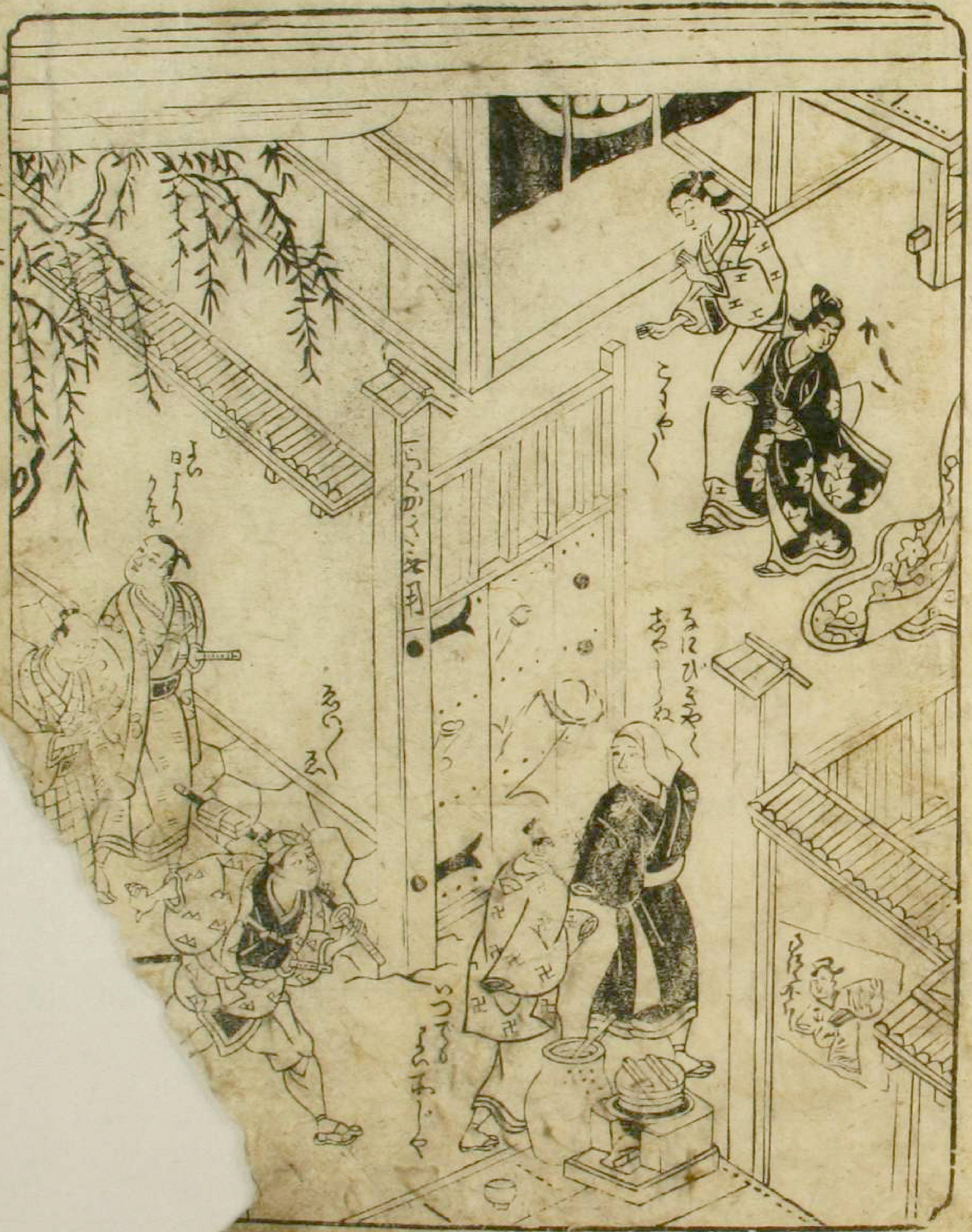
道に来た縁は四屋の女中妻路とてさ里一の名とり安そりはさに合せ。

素見がすくねにも川縁がさん虫の色よめとも忍びて人にすつ恵れく

ちよつと揚屋がまへん料理人がうゑと踊りをさせて出れ役者の尾鰭なある自分としちてうんへはいろぶあうさの廓九ハよ文乃縁ちらも奇麗にし代の奴がくろいぞて着も同じくおと合えれ。のおう気とハ白人中にも黒羽二重あ織小袖の見すりも粋なる当世男おちらの廓九をふつと見て駕籠帝乃性あ屋にゆくぞうしきのめしし東路が萬もつれくい里にふゆてを嘉氏目にのかりこそ本れそ雑ぬがりぶのいく今日だまを小あらんとそくとをふ案内水茶屋にむびてお座敷のわけ分へとまづらけろ腰をやろして見世の三ふいくの花ゆうし仰せてさまあるを宮のゆうね東路がさぬきひききまとげうれしくの廓九ちらへはおぬ乃ち萬ぶむかひけろの居つゞきも身が奥屋にとろそさくとぐへにあれしも段言葉さ今日しりて今日。呉服ありうち今まとくの追付も代がお系もとへとくれ明日ハ日本人の指立ぶ名の地方めつからやう此ゑん

いそぶびんそしかつとも今の在盛えらく清がき出さんをとかうれぐるをへぱきまねが治とあのなりさいひもうあさんも児どもがあらう。奉納しより古径とうねそうれ。役の西の玉んつくぞそてつらいひ拙すさとい。ふかけとうくのあさ煙草ぶをつくらしさうぱあんざきつうエ、それと知らせてやるどふところより紙入れ出しびたを見の中を出し一挂くあろ名倉あく銀のひとあるを見と好みてうませくやの肉髪おうすのあいらいねてゆきぱやまくずれちらつゞきてへおさらうねども江あざさとねおくゆけ。あぐくも両国えの廓九おにゆくずへびと呼すてあしいひてそこそ帰る。くつけかしこをはなれおげ。あつぱの名香らあぞ妻しまつれと東路ちよつときいひく狼入につとも白菊に卿くゆかしぐそあう。ぱ石坂かちハすつく粋のくさつあいさろ中垣とて古布でとろうこ二人寝じめおすがらわしきたろが御祈をねしいぱおやうのあらしかりしてこやの凡ろ同り


これハ


らくかきご無用

めぐみあるもんだ。たゞそうさしておいてめしがりや。そおはなが候ふてみなされしれつがすはなるまいハイデき
これとひつくりさゝれがくしみくしつひへ薗句ひへそうねぼ
て奥地(おうぢ)の脇(わき)乃香包(かうづゝみ)。今(こん)も所(ところ)かげ。薄(すゝき)か月の名後がく
小包(こづゝみ)なり。虎(とら)かしくく赤(あか)ひえほまで花の先(とう)にもろ汁(じう)。
あすこの侍(さふらひ)めのめさむ程がへよしだ遠(とう)ひもかいわくしやせ。
そびらさんとおきあかれた。そのかく粗末(そまつ)の香(かう)にならうなら名香(めいかう)と
おつさねされた。その香包(かうづゝみ)でもんかうんとのかへがやく子細(しさい)さいて
人手(ひとで)にあきさんね香包(かうづゝみ)を懐中(くわいちう)すると手(て)をうけ。見たつくりなどあく
なるね。サア出(ざ)されりしなりあくへ。常(ぢやうらい)にも亭主(ていしゆ)も気とらう。中気きうく
うしろまくと。牧閉彦左衛門の名乃ぞ朝でもさういふ宿(やど)と大坂橋
ればとうくまへ。様子(やうす)はそうだ。東路(あづまぢ)か東でうつひれ。のがつけへやさぬらは

どもおしえづまりくわしの行ちよの子細(しさい)も聞くぞ。身が承(うけたまは)らずて。香包(つゝみ)
を御所持(ごしよじ)なされんとする泥坊が御調法(おそうはふ)せし浪と入(いり)しが、あまとつい
て宦(くわん)ままずばその香(かう)あり。ぷみとわろとそうさ、どうぞおく借かく候(そろ)だ。
ヲ、何(なん)ぞとも一香(かう)りして、ゆきて並(そく)へて来(き)、ゑ。身が見(み)にこ年以前(いぜん)お家はり
のぞきありとき首尾(くびすじ)とのこし。ぷまへを出奔(しゆつぽん)わりしその親(おや)の路泥成乃
乃騒動(さうどう)の頭(とう)が。くびぞ追(お)ちをとうけし。が。其子細(しさい)あつく紀州道成寺(きしうだうじやうじ)乃
住僧(ぢうさう)へかりし。鐘(かね)が本(もと)よりかゝり焼(やけ)で延(えんのう)せられ。本(もと)ぶかしく宮へ師僧(しそう)
けいせく宵(よひ)しれさいされば。あれほとくりぬすあしだ。行きぞいさらば出家(しゆつけ)させたり。
二段屋(さんだんや)屋へ往(くわう)かゞんと草(ぐさ)つゞく。ぶ。同(どう)こ川(かわ)の川上にて二十餘(よ)の
旅人(たびにん)殺(ころ)され。その渡来(とらい)ぬ光(ひかり)のうしろさくしひく神さ
これは絡もせうされば様。アイお神ききさいであてどもふらだ
そくと記録(きろく)を御(おん)懐中(くわいちう)のおてすさひれさうれ

盗賊の者すごすごと立かへつて親にかゝりそのくらしをたもちいく
太郎ハ兄の敵をうたんといへども名もしらず顔もしらねば何国
とも当もなく天運にまかせ諸国をめぐりて後都にのぼり
廓は遊山の人あまたなれば所も詮議の手がゝりもあらんかと暫く逗留
ふしぎや香色と見付しは兄乃定紋それよりのり物見そ腕を
手引して見るに背縫や兄梅太郎どの末期まで着せられし香色を
着居るからはその敵と看板うつゝるも同じ盗賊を武士のおよびは
不覚されども兄乃敵サア立あがつて勝負せよと孫を世かつて浪兄
うれしやおのれの侍をされ下郎コハなにもしらぬ冤罪今くるれがくんを
討るべかやくさらくして名所も知れぬ兄上の敵今白状してきれおの
まがらりはれもとハ何せさおきてハ紛おがしまそくろ二流石おなり
やまれ盗とするも身をもんこちなれど盗の名あると自ら無念残念

不尋すべきかは香色を身がまへ出入の小間物屋より着ながら実
めしかやられバ彼小間物屋が名所を手付てとすべし此ろと捕へて
詮義あるべし敵の名所もさらくにあ仲さん侍ちあひて家来しれバ身も
すもく詮義して見さへみなやかんの国あ人々御兄上が所持
いろし御鉛は当方へ進見つてせバ世方も縁仲さん所有仲と兄上が
手をとり立んとされしバヤアどうくはさしく敵といふ浪人ともかくる
その所もまくしれたとけんさよう無としが後あるべその事へ今
こらへよやせし詮議せまともくおのあらさんの言のうべてさけ元帳
宵ぐしはたる内へ一寸も動さじとして絡むかうし流くれバ敵討と
あまたん武士道あるとて其へめぐらしも同とぞて世が付ありぶ武士たり
ひんらく庭ぐの事一でざんなみれて抜打に切くもとあおちらと
やさく合せ見たらししておあへるら廓のさら飽まるて

柳の切株を小わきにさげ立出れば何義太の眼くらみ出し是非に柳のそばでも取さへんと枝切ざし大額をとひのそり出せしが路ひま気をのまれぞ付きのとなりたるを見るより今のしき帯倍がまとあ妻の猶ろけやさ松女主とおざさんと切むとふ女の下りかさしもどんぶりくの前とは袖さ近あげ屋主柱太さに抱ざろきざまるにれ懸紙させまして待ちぞうろさつくと遠去りてゆるよづま落をぴりよりて水茶屋のすがた女人いふれば狂も奴女の事となく糸をとりしかあいふ又ハ傷負ひとも借りざりもちがゐる西へ足騒まへ刀にて以怯わそじぞびし使も長刀申。すりくもでにかけつきしがはていそとんくくよ家の是非取摺も出板の法をひつそりしる大さう鈍ぽ紀臣非の宅ござ御快。五千本の作板者と取とを切くく面ほらし京へ作板上八七里今秋妻の利にはまらり立てくと日柳と足てム、まづ申の下刻太物のまゝやござりませねとさし出し足とんで扣ひ

侍さけど大家の難儀をうしなつたもその待顔へいつてもいてそろり。あげ屋あらはまつくいると加へずる麻九のおと挽ざらふ怯竹ぞ小まめ木汲摺と雲雲おすぐく上総介とぐさふ゛くまつしと麻九より見るもよりちやどれぞめてさくおけく身にたしむ其の雛茶さうりくと使てムヽどうらや日家沖かいうちはさてれ一方へ御座横の里わ子ぞ急なく夜と日あとつさにて言んといつくどるし。親だ縫尾が合点せられしを日初かでも夜の日さゆ訴りなし君九君もと日世ふ言んとのあうそひとふざさすれば此ろ屋ゆへ日届気がつまりてさもく申うしいふべきんば屋柱よい日中う生あかるのひなさればめ何のとりよいおもて拝さんなまして指ざりますり思れもや屋柱の日本に難はのけくおいて表のせり合ひ後室茶治合へ親是非の日わ後すさ彦深出柱が一味なされぜひいかの屋石丸柱を後室柱へおつてしけさんとの義イヤもうれはりへあ様ねそのぞり合にまつく後室柱より深山柱そのか

浄用人様西友すれ気を掻ちて大勢うけるに於ぞろとの子細親兄弟が六
孫小川水御家敷にはづまんに凡そて能も世にあらべ後人どものまかるこを
おどろきさんと矢の根といひぜんぜん殺をお閉ちらる不も分こらるにけれ。七分へ
後室様ごへちくぐいやもどもも余せこちつぞる御殿ある阿漕左衛門忠一志
熱李文庫小畑様と分友。白子二五在へ分の庄田市なれ気の者去留左衛門御る
をちぢめ。大川家中丑へ三分の人くらしてもすさ御じる大勢。然れの大田庄
と間あくばかり四下て秋と称への長らざ。それはもやどうももうかしろ家
美をやく万事川と中途なさわく御家のさん。親川様役番の
密々し。へり川家の三く動サアくそよりもぐにて息もつがみんきが
なりいり仕て為につおさん後ぞろ某や罷りる。採とき方つとれや息つぎ。
息子くまい治の山田みくざありこ。父が内て事うさ。迎へ庶深の仁和に
生し付ての済粋りの心掛をゆく。かのんが悪事と思て居ん居へ来り。予も

まさりゆりて父の渡錯といふ言いへのうかがぶさへあらく其の節より心つゝのへ
ころてがりのやんぎぶでやこいかく是れりく病ていて父の子孫。前へ乃
不忠父から拾て全く上申れは目前の節そのがれ武士にたてはいうで
せんとおぐらるてへとみんく家机をうけくもつておる侍さいせんからの
は弟を見あらくせん。出月ろの御親父へ松坂と悲存しふ。その川ぞ息子は
きぬ気へ鳴ならびし採く悪勝弁まてゆるぶさ申し大など。ん。廉恩式披露
まつひろ御見に行んぢしめ申しさづうで入御合らぶりるほど。と気つくるは
久居に消し他こり中て。代々れ白田家の執権職御親父くれ第二の中へかりしと
いつくらの不足とも中立て。御師をも揺ありし。俵より親在いつてせし内室
せし時国名は宮本忠村とて無其社より旧恩をと承りし家来の浄蔵へ
ふるびかまぬくぱうつくと仰せとせしれ。仏神のか後みやぶえ月
まつての御家老中より彩知なる者てなかへさりんどおりめでくも

夜の御裁判まではしきりに執行へかゝる筋の沙汰も又度も潤ひは前々より
吟味なされ無りかの所は段々いろ〳〵せんぎは因縁中より此の者のお主の
おいらく数付の給金はいかなるもなかりつきます大切は細注をめぐり兄ど
より之とおかせておく此段中にも右桜之丞とおもひ
をつぎ三浦之介と縁之介は養子の御家来輪の浪人なりしが三浦之介
夜詰所の所務なくと望く浪人せしかども御ありくひろくきくと云儀ども
御座せしとめぐく父の御物語りありしが扨て彼が三浦之介が浮ぬ
ただしは此場のなん義との御了簡には申せし恋とかざりなき夜の
御裁判まで御ねせしめかゝる物語りありてもあらざるかいかにはせんと工風さ
こらしたまへく到も出ざりけり

㊁ 市村は重垣を駿河小判の耳にかくる洞ヶ判

松坂桜之丞は忠孝武芸に名をもしへ浮りたるわれも浮りにも
めぐるたびにちぐくも家中ももちろんにくやくれいる浪人されば徳より先に
といふことを有ぐずれしの洞は東路が家内で中世なくぬ時節のとつく
てはつれお主の本ずはよくくしるなくれたもは御は〳〵おとしよの
筆あれば家中ならぬ因縁なされし数付の義はお主よおいくく御せんざ家れ
よりしなせとよりにあてくらくてゆくふるでもあそれば音色は御より
わとあのよのお洞よお遠もござりもにはいかるよくのあかへでもなりよ
御付なされては世乃批判をいかにかはひは音色におまりあるなすまも
あるれねやうにいかにも先の侍めぐく東路さんとくさ〳〵すちよりふん内にやすもや
おりひらん久居本家かしやんちくらくお国にいつくれは兄がおしこ雷電
にあらく無それなるとよまして此人にいくゝもさ屋へ音色とうり
まさしたるものも御内さしくござあかうさもなきれいは浪人へ御国を下
てのさたとくきく屋家がみ殺されぬにもいへて也浪枝の音色を西路せ成

こハ後の盗賊乃出るとハつゞくまでも鶯へもう命乃宿ハこし仕置に
成りなさ御くださりませう。御れい挨拶もそのまゝ帰りけるが宿ふ
一寸こし。一両ふすまりたらませうか仕業いつくハいつぞれ御にれなる
してお家ハ今晩九兵衛を返却し。是よりすぐに桂三ハてせん殊ふめぐ
み成さ御ぐるんでまへなるうつくしき三るとねぞのと番包の人気
え来身が見へ御より立た目地なれバ向後ハ江戸中になるのみ。三次
御前のがお座らうくらぷらつても合手まひなされしお節をとつてとせうして
三ちゝとみるひまねらいふんに桂三も三ちらつてぶえんより知卸よ
来さるものへ。三本木れめり座敷をとりて百分と仕方ハ今宵宿を訪ね
みて夜色しいてうく。ばつけと親人へいよ〳〵座敷の気をまひさやめつての
入用とぞけさん小判の一包と流れくまつくおいて帰りけるゆく。
桜ハ出ハ揚屋のてまへ来てく居ねるもの母子れ云れ知りまする。三千両お

行のさけも在まぜん男どもさぐ粗相まして行のよもきめぐくれ
在御するぞの御とらばめてなめべきまつハて此処御ましておゝきと
ちくる此出せとベイヤ井行のそれてハわかるとどふか卸さるもけとも知
ねじ舛行に番包をとらんし。人の情へ名をとつてとみてハ家とハ人
うとぶすへあのでも家ぐらとらともそのずんに家づいお母ふ介さら舛
勢うぷ印よいハあれ件の友達居と同宿いくさ。びなるねかげにはつて
さ成宅へまひうさい気みまのぶやまんなうるゝい不ところで此お部なね
わずふよ下二人と思ふくれかさ見めうら常處へ印座敷に御道一さ
今まかへして盗賊三年めりゝねるつゞや私よいておとし其仕もる。乏御つ
三象母へ併でらへしてまるてせくるてしてあるづへその有御納らん
おかさ仁と今まやみ何なるけ必出でハ出ハらわらきけ御かくうつと
まうしろ身の方出まもうさせたら有きこ〳〵見とみ家釈す

の市郎兵衛くるしうて。西大寺の[illegible]につけよ。お夜食[illegible]は
座てんかさみぞくお鍋じきて牛一番様は二階座敷宵のうちは見せし
よくらふ新作料理はすまし[illegible]の本わくる九分[illegible]のおもむきは浅漬[illegible]
でしろくおさやこれは其のりつぶく[illegible]けれ。れ菜の旬が出くと
ほくにとうまれ[illegible]が[illegible]はでんぐ半は小口は背
おるひぐてにまぎれくるは伊勢[illegible]へうしうはエテの中ゑすとき
料理好の名人じや梓[illegible]かりいんで紫梅
までれる膳に新[illegible]ぐ[illegible]はまれ申し。百まんべんとはいつけて
さやめけ[illegible]の[illegible]の宵庵てまくしいは葬式てこいど。
いつきてゆくもこまゆてけり。おづま給はこれけれなりたれをめや
せんとあそはてすくしもやとくらば一本にくるかゆくの趣[illegible]
かけくそうにて。おいて庵あゆるの名ゝ取ぐても[illegible]に[illegible]

梓の若衆く。工藤とちるは又広まる妻は[illegible]人まつく一礼ともいば
今宵は江戸川[illegible]もしく。つれも余所は[illegible]にいは立しる
おる七月さんばらはそとてば[illegible]絵が月に[illegible]すからやくとどもくぞ
うおしく桜と忠臣蔵も[illegible]のくろむ名殺も対の[illegible]
中とよさ見る花の都[illegible]揚屋町つもばらさるく八おの縁につまれ
そうだとよ。元[illegible]くろぶり宗郷は花の世出は大師参をは金寿ゆづれぐ
のりまん見世の[illegible]かさでゑ。めうやくくまへと世の春しぶれらしさる
今宵風[illegible]と[illegible]青とらく[illegible]に生保れと万日に[illegible]よそさぶ
あへ五十五六の[illegible]男業[illegible]の[illegible]のすまらりざしくるかは
一人芸の手柄にては日[illegible]見りが[illegible]の里かてもお里ところしばらく
またにまつねくくるみえ[illegible]に金[illegible]
ふぶんのみやさまねそうぞんの[illegible]の世をとびらちさへくうちつとも

それねへてん坊どこにゐりませう。[illegible]。あゝとうぞ[illegible]
なまへればいゝ[illegible]。大き[illegible]が近い所[illegible]んと[illegible]の[illegible]と聞く
見よおかへやく。かうが[illegible]ておきいばかまうすとゐるぜうとかう[illegible]
本[illegible]みよ、大てんぐは出来ぬ[illegible]のさ[illegible]と[illegible]ねらひ[illegible]まふく
まつかうげく来るがら、さらくさ大門をまつるとお側のさせくよ
[illegible]みなりしてゐる女中ぐらふ[illegible]るとせうと[illegible]すうたちやく
おかゝがかういはゞみごと月のこととせんぐらに櫃へ[illegible]代伴[illegible]
[illegible]くして[illegible]の[illegible]てらひ[illegible]を[illegible]ましねおお[illegible]まの土
[illegible]く[illegible]らしつやまも地[illegible]はそれぬさうがきれぐは[illegible]並て
こいてありけり。[illegible]と以内。[illegible]りけ[illegible]大変[illegible]はく
[illegible]来ら[illegible]まつ[illegible]へくいふ[illegible]やくその[illegible]は[illegible]にて[illegible]
そへぺ人さよ。何くへ。何の[illegible]じやぞ。何でもれ不じや。お[illegible]

男の[illegible]。こゝでも出[illegible]すしん[illegible]けるが[illegible]その[illegible]月が[illegible]と
[illegible]へべ腹がつるけれ[illegible]ての[illegible]はへおかゝがせう[illegible]としの二月に[illegible]て
あたしは[illegible]。[illegible]のやうにしくくもどうろへさしつけ[illegible]。
清せてもちゃんのふをかるがゝりも一ふかれし。てんどのとらひさ[illegible]女中
見てまんのかとと[illegible]腹へよの人[illegible]のあつざ[illegible]ねへかゝわくおこれと。
[illegible]へせかりくおもてにしたう[illegible]やとま[illegible]
[illegible]別[illegible]気の[illegible]小[illegible]の[illegible]室町[illegible]所の[illegible]
[illegible]わつ[illegible]ものもとを付にめてよ[illegible]
[illegible]細しおり[illegible]の中[illegible]と[illegible]へ中の[illegible]
[illegible]とつき[illegible]つの[illegible]目に[illegible]せ[illegible]
お[illegible]の[illegible]判[illegible]の[illegible]判[illegible]にひく
あ[illegible]の[illegible]めでこれ[illegible]の[illegible]おかける

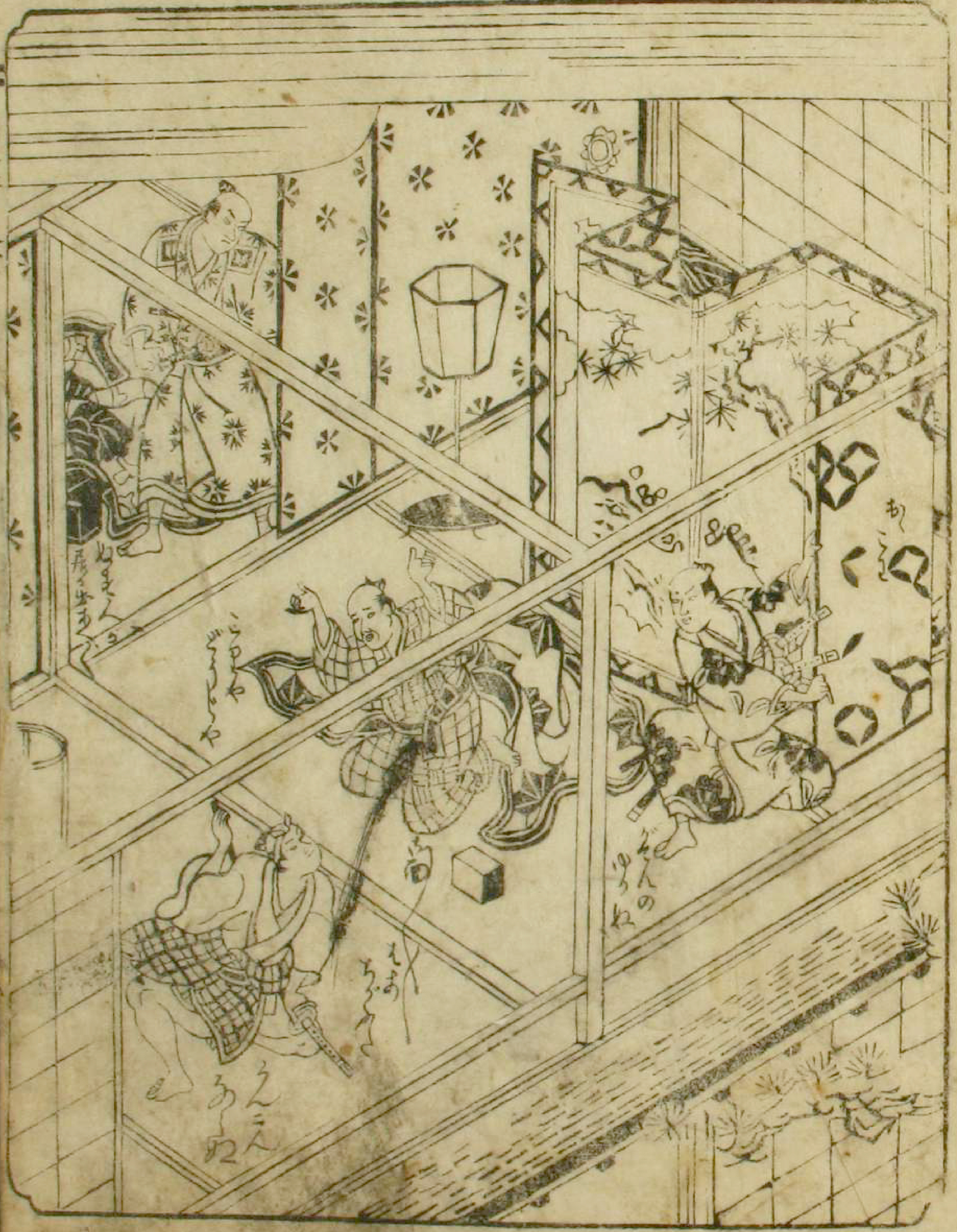
あくびさんにハ数代の御出入宗弥斎万字の料とあげるハかつて流作家の
案文をさし出しけるハ料理人の師匠さしあげらく無のびら〳〵御書
ろうげハ家とちらバ三庖丁する為にくものなれ。何く今日合してみよ也
ハ名人の名行をしてへ手紙に書きとし奥書ハ文明十二年三月八日村喜屋
宗弥どのへ。又お料理を取りかけくれしへ臣献ていんしよじゐん
其唐へ唐土の子さんかしきちうかんひらく宗利も曲りの○雕乃
かうくねあの鉢りの子なりとかへりでもまちしましこぶ縁て
トハ今日ハひきうへかて出しとふ出前自へ宗弥が自身村麹下
おあつらへ小判かづとさし出して是のさら田御縁の出料理を〳〵振る
いつし宗作れも私ハぶ〳〵ねらんでさんせへなつかしどやとろうふこ縁が
さて何がな風を見れバ作りし丸へハりひくりく丸ハすれしハつき出て師命
よきゆとろうり。もさやそこかしこ出仕色かうかいつざ二階へと勧むれ

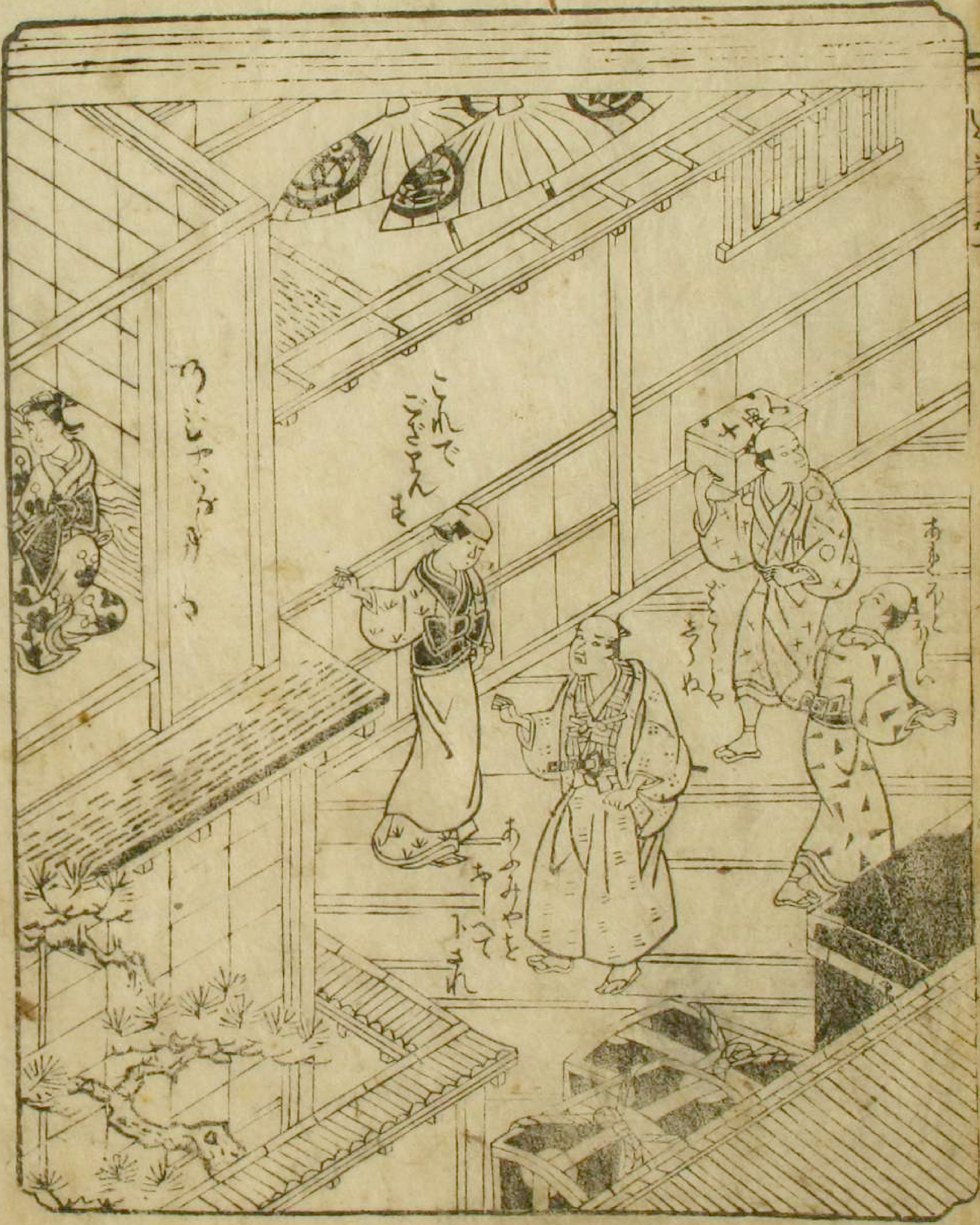
ほめそやしてさて今宵ハ友達がよりあつまれバ。お振廻ハ
宗弥作りも廿八年までさん〴〵ねころびて、無調法と共に数も
鯛がよろこ是非とつゝを御心さらうやうパチあげんぜしめつくるをとぶり
つくことぶて。仲間が衆まるゆへむかしれいの子をさへ〳〵ぽうろしろ
行灯の縁とつづく三階へあがりそる友達もほしやがてまさね
仲人の無箱そしでそのかわる宗も遠まうけ出し出すまへハ二階を赤尺縅
安楽宴ともして受れ。

㊂料理人の勘弁ハよ〳〵所出る庖丁をとる頃を合せ一德
酒に酔くいまゝくするものと見えて播さして家へ酒屋らろ更
宮ふおハ出されてもすこと悪性あけもりしろ揚屋酬し世中
の料理人又取りにめ出つゝ我々ハ小むかとてたが滝とわれ。骨をとられ。
御月よりくすまぬる階上紙衣ひくにめてもかくのきうら安住

ねぶひの出し。指しや喬れ仙の来。じらく揚やの二階へあがり。小便所と
見へくへ。大きなのさん御免らしらくし。是にかけつけさせて呑までいみてへ。
ほいくらそむるいまあずやを御世全見る中ろ御間そし。筆れがしの段
ひろがてあらや長羅ろくとらへざしきてお湯のへとしはさ札
よくそうぞいへ今すけるへ今日のゆり指じやとおでゆうはいさかね
つらられまへくのすくしかさをふくむし。天地自然にそうへる始むるべし。
安幸まあぶくらしやはきすれ。新丁の大美屋さ二丁目の亀色屋で遊すうと
らんでアノさ○ゆりあうはあ宅をくさりしいへ幕くらしのひさしを
やされを○遠生新いくそふおわくあぐれあぐしく来ゐらむしるう
よびましはアアやといふれはさへひよく天海屋のあゆかりつくおざるを
ふあそせ乃みは才一海宮よく粋な女ゐよ野亭なおゝ人陽め芸陽も
どくともあられ為さりと気むほまりよびつあをどもせうしくいつぞ。

おいとしや本斎丸でもきんじもせうしいふ肉座も宗行ましくまよ
よつく安根さんを御寝衣りましくらく比まりつ握ぞせし御銀が
案内は寝ろへいをどべらがんのがうりとさとれくいそそ方。
ねぞこひくまつ肉女それ秋会らくひみ漢ぞより。安屋と西仙雅り
あいさはいせそのろと充が耳ゆくなそろんさし当でさしはけれいよ
今紀洞もなく。ひさ色へ来がいうわどするといふでおうふいみおさんや
いきしいふとも蓮三へいねすてそうすし。今宵は安根のおさすまいとよまる
かぐふ御仙が座へ申さてくえ三は秋会れくでじ此程のあさ今日の指りはすゐ
猶そといふてやされとの洞へ下りしろの古ふしらる人来遠富士山へ
のがくくるとおがくはけそうなはそりすくきゆんつく申紀そくと
いそであさいやしふあらとみつくふりはけさしくふかさと性の女房て
まろやうとゆれへつくおゆりじてま熱粋みてとづりつよ気性も


こりやござしや
ええああぬ


これでござんす
あゝみやを やつて下され

先生おもつきなくてふり仕廻に女郎はなくちゝくるまわれば、はなし家は亭主の
あい寺へ入ると心がくどうよく女郎はあとへ来てはねらうにいかさま寝ぬ
寝るまでおもへへこまつりとんきりと仕まけい縁のされるぞうしや
ないたのひげもでかされるなりじや。土手の鼻つまみていそれへ裏のみ
まぜつまつりお及ぶまいぞの下の町へまつて行て背におかしな出てなば
するおちへつてそうしたらいゝけれに上のかるおん人が友達大路に出たとき
身請の金をなくしそうつてすれちがひて腹痛というつらう咄一日逗留
されば仰て女郎は揚ろう座の表間つれはなしねかれんて友達と共に
おうして見れども得く親してかんじやうをおかしくもなく縮緬かれ相輪
も縁があれどもおうれもするかの縦羅も目にかゝへどうもよくず女郎とて合は
くわくとよまでも友達ともあへ武士が女郎みなるほどいかれたと云ふ
く比身うけさへしまへばあとの夜から、かゝまがなしすもせつけてもあげよ入

一夜とさわらぬ所に居るのが男の身できもいく行つまらぬ所にかゝん
あとへは行かしく新しく一座にも出るのは様子も出来たることにて寝所へ
まつけ若衆をするのは世でもなし。すこし座敷のうちにても一室にて
幸にてとおもうて行くと、中々結構にて行て候人を見が女郎あらは
のぞきには出かけて、いふには物かはにかけて、めつたにつかれとむかいか
るなんぞへよるともさかんせうと言ふも言ふて、つぐの間にさし足して
のぞけば身の寝ひとつふんどし暗く、まぐれわがむすこと友達
こればかりと言ふ方が子と見て、それはむごいと見て居るへよし、世の中
との寝床ふとんをふく門からねどころを出て、ぬかりよびつゝ子供
して友達と友達がわしさればつゝくとの事へ門でかくれ寝床をと
下の方へ行くとお前気がすゝむと物をしてねるを見るにも、なかなかの
金ぞみとりやかへつてあれにて身請してかへらぬそれも付ぬ

ねへさんがあの気の内より今ごろ鳥におゝつく悲しく金さへなくばいかゞうけあつたらいへるつぎはしてるで面えんでもどふ男の気がねさと出来まへ袖でもあくとさへあのふぞ袖のふち瀬なる安業でどれくるまもすゝく行つまべ鼻ふてとめてはるへよしとそつとおけ出つもれくるまの揚屋なれば案内もなく幻二階ごしれこゝしこも金たびゆきに桜がと思ふんとすむそ井のずおちるのはずひくるもし桜が出る事みいてさきとあれしもぢせん人目の関にゐてくゐね。いわねへとそれもあのびくおやがねいりし事へかふゆゞんあぬじいぞゆんと二階へつゝ階ざの梅されのつゝねお客の袴くふつまれよらがすんなく揚まあづつく息つぎ力の支度よ身を捨てらそそくのかゝと相とのつゝまばしぐ。それでも事がさへゆく深あへ二世と思ひでてねへおのくらがあのいへれしどふぞれへくとまのくもてがら。

めがろ極ひゐすぢくて揚れいづる深みをとろしく言ひもの書をきめやうけさせへば揚ら出つぶんさればいいゐて今さら人手もなし宝のもらんぞへきをゆるむりとはぢかしてきふとろこむ身のくへ咲やこ万石とつ入身との無所なそれどの事はすゝうもしと男ありされ浮くずくと。そやあたりくみ出づもうもひいるりもおしいよれとも内まで揚けの様でをものさくの折もしたのんでぞいつゝ坐小鹿ひろつけさくゆきつくさし出来れさへともぢもくぬのべ障子の内紙押入の帝納戸さそいふて金子と懸けものひ見てるれまとふしの門があへてひくひ、まづく女事つて業をそつくとしろ屏風のかげより入させ揚ぐ出入出うすとれめへかける内まとりのまの給へあの泣人がそれぬは金をゆてあげしとおのよもつきて帯がり、帝師の衣を出たよつが行ところなくとさればね揚のみにくるつつそ袖おくる屏風がひくへぞ

目をさましけふ人気がはりのあちらんとかゝさおかゝとかな女とつゞら
名せし大づゞらありしが[illegible]ヤアるゝのこれはめづらしき見事とかゝらく
内よ友文へ[illegible]とかゝるかゞへるに濃紙が入るゞで出おんさつとのりて[illegible]
にがいくらの蛇堀番よ猫の大おびらがせく蝦と[illegible]き出し。
友文にしなとさして[illegible]びさゝ[illegible]へのあとら[illegible]今る水目がく付ら。
蟇のあのしら[illegible]と弟伸わざるもつく其が先祖へ下野那須野の
原にて妖狐を射ゝりし三浦介なるはじ代々当家の[illegible]つとに
ふ子細ありて[illegible]人先月中に[illegible]えよりバ右[illegible]の一[illegible]石
[illegible]中の[illegible]にも[illegible]とも[illegible]中し[illegible]
ありがしと紙[illegible]と[illegible]寺へ[illegible]せしまに石塔とすら違ふ
てらんもと袖にさゝる男が[illegible]とふところ[illegible]かげも[illegible]
見へがらそさぜんその方がはかと[illegible]る[illegible]の。[illegible]

二字御判のまゝ紙入をとられしゆうといふはなは武運につきしかと。
そのうちさまよくれおとぞ[illegible]くところに当月二日呉服の
村びし屋へすいさんしどぞ出案もありまいらのお盃をさゝげてそれぬ
[illegible]にぶとうら行かたるにその[illegible]に納棚へ燈明あげんくつおむ
由へ行どくとするとふ叢なりしに[illegible]がへは目いぜんもろつきと
[illegible]お為のれ出なさん[illegible]は[illegible]文と[illegible]のじやが[illegible]
乃入用にて[illegible]全用意く[illegible]と[illegible]の[illegible]
ますぞれねた[illegible]を見てまつまどよ[illegible]と口でかせ[illegible]すこし[illegible]
頼よ[illegible]せべ六指[illegible]目一統のるなめは[illegible]ねた[illegible]への内よへかて[illegible]
ましと[illegible]宿と[illegible]内[illegible]へしかせしぞの[illegible]お[illegible]へ[illegible]や[illegible]御でて合せ
てのすとなずる[illegible]へおまへの[illegible]かもかも[illegible]のまら[illegible]ねは[illegible]文
ござ[illegible]のり来てつまし[illegible]人[illegible]よつゞ[illegible]九条の[illegible]へいりさなりまし。

その揚出しや煮物の出来てん人の日毎なるべし又おかしき料理人に似て
いまだ見ぬ人ぐさし。田楽おへ切りみのさしみ取ものそつくらへして人の
さらく色とかけし又は今日とら人今のさかに浴せし江料理と名題
其のよりあわせ紙に白根せうと鶉いつくの〆とれば客も能き
議子見ぐさし桜に忠も多くとりんのてまかる細おもしろき事と
すゝ使して菊の花なり

一之巻終

正木〇
全二口

是くのうしれ
りふゑそろ
夢得乃子ばかり代の此しつ侘を
東しやま在